

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 116

学校名・団体名	熊本県国際教育研究会
HPアドレス	なし
コース	教育研究
活動・研究 テーマ	自己を確立し，様々な分野で活躍できるグローバル人材の育成を目指して
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>様々な課題が山積する今日，課題を解決するには，多面的に物事をとらえていく必要が以前にも増してきている。内なる国際化が進む中で，海外に行かずしても，多種多様な価値を共有しながら共生できる子どもを育成しなければならない。本研究は，以上のことを目的として，「在外教育施設における実践と課題」「小学校における外国語活動（等）」「地域や学校における国際理解教育の実践と課題」「国際交流・国際協力・国際貢献の実践」を4つの柱として，国際社会において外にも内にも，活躍できる子どもへの教育実践を深めた。</p>	

第20回九州ブロック海外子女教育・国際理解教育研究大会 熊本大会報告

去る8月17日（木）、18日（金）に第20回九州ブロック研究大会の熊本開会が国際交流会館で開催された。前日の17日の行われたレセプションでは、各県より多数の参加があり、各県との交流を深めることができた。大会当日は、基調提案の後、元エアロビック競技日本代表の大村詠一氏の講演が行われた。「病気とスポーツを通じて感じた内なる国際化の大切さ」と題し、実際の演技を交えながら、和やかな雰囲気の中、他との違いを認めながら個性を發揮し活躍する術などが話された。1型糖尿病患者としての取組にも触れ、偏見を跳ね返しながら個性を磨いていった様子など、体験を通じた貴重な話になった。3つの伝えたいこととして「自分の考え方、価値が全てではない」「知らないは不安や偏見を生む」「コミュニケーションの大切さを伝える」を挙げられた。これらは国際社会で活躍するグローバル人材に必要な資質であると感じた。講演全体を通して、本大会テーマである「自己を確立し、様々な分野で活躍できるグローバル人材の育成を目指して」につながるものであった。

午後からは「第1分科会：在外教育施設における実践と課題 第2分科会：小学校における外国語活動 第3分科会：学校における国際理解教育の実践と課題 第4分科会：国際交流・国際協力・国際貢献の実践」の4つの分科会が行われた。

（第1分科会）

第1分科会には、本会から本山和寿教諭（天草市立河浦小学校）が発表者として参加した。日本語の能力の差など、在外施設における教育の課題について話し合われた。個別指導と一斉指導をどう扱っていくかの難しさが浮き彫りになった。在外施設での保護者が子どもをどう育てたいのか。日本人学校に入るステータスなのか。どう生きていきたいのか。日本で活躍したいのか。入学する前までにしっかり保護者と話し合うことの大切さに触れられた。

（第2分科会）

第2分科会は、発表者に本会の宮崎寛子教諭（熊本市立尾上小学校）、助言者を森健治校長（熊本市立富合小学校）にお願いして行われた。宮崎教諭の尾ノ上小での小学校における外国語教育の実践が詳しく説明された。来年度より移行措置が取られる熊本市の担当教員からは、担当として組織としてやっておかなければならないことなどの質問が出た。教務主任への時数確保の依頼や、英語ルームの活用。校内研修の計画立案など具体的なアドバイスが交わされた。助言者からは、小中学校の教員の相互乗り入れ授業についての話があった。互いの教員が、授業作りから一緒にやることで、小学校の教員が、中学校の専門性を身につけられるメリットや中学校の教員が、めあての提示や振り返りの手法、板書等の小学校の丁寧な授業作りを学ぶきっかけにもなるという助言もあった。助言者が校長を務める熊本市立富合小学校の英語専科の取組や英語教室の設営方まで丁寧で広い視野に立った助言が行われた。

（第3分科会）

第3分科会は、実際の熊本県内の現役高校生による発表が行われた。発表した熊本県立済々黌高校では文部科学省が進める、高等学校等におけるグローバル・リーダー育成を目指すSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定を受けている。従来の教員による発表ではなく、生徒による発表を本大会の目玉の一つとした。特に、英語を話すというよりも英語をツールとしたコミュニケーション能力の育成に取り組もうとしているところを参加者は感じたようであった。知識を増やすと勘違いされがちな国際理解であるが、取組では異文化の中にも同じ部分が多くあるという気づきなどを大切にしていた。「国際感覚というのは異文化に対するまめ知識を身につけたということではなく、自



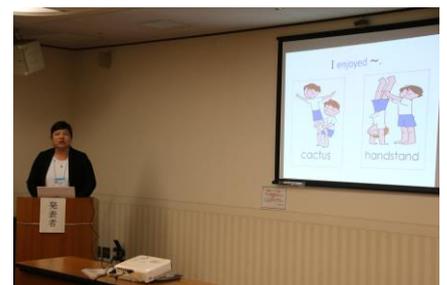
開会行事



基調提案を行う今井研究部長



第1分科会の様子



第2分科会で発表する宮崎教諭



発表する高校生

分と相手を相対的に見つめることで初めて気づく共通点をきちんと受け止める感覚であろうと言われている。自分の文化にもそして相手の文化にも、ともに良い部分と悪い部分があることを理解し、それを受け入れて自らの世界観を広げることができる感覚を身につけた人を国際感覚のある人と呼ぶことができる。」という助言者の言葉が印象的であった。

#### (第4分科会)

第4分科会には、本会の池邊頼人教諭(水俣市立袋小学校)が発表を行った。カンボジア支援活動に長年取り組んでいる小学校の実践である。カンボジアに学校を作るための募金活動やカンボジア留学生との交流などがあった。取組を継続して行おうとする子どもの気持ちを大切にされた内容であった。芦北町の国際交流まつりで自分達で考えたブースを作ったことは、大変良い取組であると助言者からの評価があった。自分たちで話し合って決めたことなので、主体的で創造的な活動である。学校を作ろうという明確な目標があるところがよかった。「学校の目標が地域を巻き込む。現在はまだであるが、地域学校連携協議会を立ち上げて地域と話し合いを持ってみてはどうだろう。更に発展する可能性がある。自己有用感・ふるさとをもっといい町にしたいと思える子どもが増えてくるのかもしれない。」とのまとめがあった。



第4分科会の様子

#### 成果と課題

九州各県から発表があり、参加者もそれぞれの実践を持ち帰ることができた。各学校で、実践を広めていくことで子どもたちへの国際教育に大きく貢献できるものになった。発表内容については、紀要を作成し参加者に配布。意見交換の内容等は本会の会誌にまとめたが、さらに実践内容を広めるために、普及活動を充実していきたい。